

「人間である」という概念の意義： 種差別批判に抗して

浜 野 研 三

初めに：種差別批判

所謂パーソン論者によると、「人間」ないし「ヒト」という概念は両義性を持っている。すなわち端的に生物学的な種の分類に用いられる場合、すなわちホモ・サピエンスという種に属することを示す場合（「ヒト」と表記される）、そして過去・現在・未来にわたって一定の同一性を維持し自覚しつつ存在する存在、すなわち「パーソン」を意味する場合である⁽¹⁾。パーソン論者にとって、前者は単なる生物学的な分類でしかなく、そこには道徳的含意が伴う余地は存在しない。多方、後者は自己意識能力や高度の理性的能力を持ち、複雑な感情や欲求を持つ存在として、慎重かつ深刻な道徳的考慮の対象として扱われるべき存在を示すものである。パーソンは時間の中で持続する自己についての意識を持っているがゆえに、生きたいという欲求、死にたくないという欲求を持ちうる存在として、その殺害については深刻な道徳的考慮がなされるべきである。その反面、パーソンでない存在は、生きたいという欲求や死にたくない欲求を持つ能力を持たないゆえに、その存在を抹殺することには、それ自体として道徳的意味を見出さないという態度が是認されている。

パーソン論の立場からは、所謂ヒトの中にもパーソンであるものとそうでないものが存在しており、両者を明確に分離したうえで適切な道徳的対応をとるべきであることになる。このような主張の背後には、人々が「人間」という言葉の両義性に惑わされて、パーソンでない人間を、パーソンではあるがヒトで

はない動物と比べて道徳的に重要視するという不公平な態度をとっているという批判が存在している。ヒトである限り、パーソンでないにもかかわらず、他のパーソンである人間と同様に取り扱い、逆にパーソンである、人間以外の動物はパーソンに相応しい取り扱いがなされていない。これは、生物学的な種による差別、種差別であるというのである。周知のように、このような批判を踏まえて、ピーター・シンガーは新生児殺に見られるような論争を呼ぶ過激な主張を導いている。

本論文においては、このような議論の背後に潜む前提を明らかにして検討を加え、それらの前提の恣意性、少なくともその主張者が想定しているほどの説得力を持たないことを明らかにする。またその検討の中で、種差別を支持する立場の提示する人間像の方が人間についてのより深い理解を踏まえていることをも明らかにしてゆく。ここで問題とするピーター・シンガー流の種差別批判の前提とは、1) 科学をモデルとした客観性の狭い理解、さらにその奥に潜む極めて形而上学的なありのままの世界・実在を想定し、それについての概念を正当なものとして認める態度、また、2) 個体に着目して、個体と他の個体との相互作用の意味、まさに他者との関係性が持つ意味に目を閉ざす、その意味での個人主義的な態度をよしとする考え、最後に、3) 潜在的能力を軽視し、現在の能力や性質に視野を限局する態度、いわば実現された能力への排他的着目である。これらのうち後の二つは、潜在的能力の道徳的な意味を無効化するものであり、彼らの立場を支えるために極めて重要な役割を果たしている。以下、順次三つの前提の検討、批判を行う。最後に、それを踏まえた世界や価値や人間についての像を提示することを試みる。

本論文は、新自由主義経済の中で企業の行動の自由とともに、安易に個人の責を問う風潮が障害者に対する風当たりを強くする時代の中、種差別批判に抗する立場を展開することによって、19人の障害者の死を招いた事件が象徴する余裕なき社会における人間の在り方に対する反省の手掛かりとなる考えを展開してみることである。以下の議論は、アリス・クラリー (Alice Crary)、コーラ・ダイヤモンド (Cora Diamond)、クリストファー・グラウ

(Christopher Grau), スチーヴン・マルホール (Stephen Mulhall), アイリス・マードック (Iris Murdoch) やバーナード・ウィリアムズ (Bernard Williams) などの洞察に大きく負っている⁽²⁾。

1. 種差別批判の前提：

超越的視点の容認・個人主義・実現された能力への排他的着目

[超越的視点の容認]

まず強調されるべきことは、種差別批判は、「人」ないし「人間である」という概念それ自体には、道徳的意味ないし意義をまったく認めない点である。上にも述べたように、それらの概念は、実は道徳的な要素を一切持たない生物学的概念「ヒト」と道徳的考慮に値する性質を持った存在を示す「パーソン」の二つの要素が混在している。それらを明確に分離することなく混同が放置されたまま用いられるため、種による差別が見逃され、容認されてきたと主張している。このような批判に対して直ちに問わなければならないことは、なぜそのような分析が正しいのか、その根拠は何であるのかである。換言すれば、パーソンに対してなされるべき道徳的意味の付与が人間に対してなされ、ひいてはヒトに対してもなされるという過ちが犯されているという診断の正当化根拠は何なのか、ということである。

この問題を考慮するとき考慮すべきことは、功利主義的なパーソン論者シンガーが用いる「宇宙の視点」という概念である⁽³⁾。このようなわれわれの日常の経験を超えた超越的な視点の存在、そしてそのような超越的視点に立つての議論をわれわれがなしうるという考えである。そこには、自然科学的な世界理解の優越性と、そのような世界理解を持つことが可能であるという自信が潜んでいるように思われる。現代の科学理論の成果とそれを応用した科学技術の巨大な影響力が支えている自然科学的な方法・理念への確固とした信頼が潜んでいる。科学や科学に準じた客観的な理論的営為こそが世界のありのままの姿を捉える唯一かつ最良のものであるという考えが大きな力を発揮している。こ

の考えの背後には、われわれの経験を越えた超越的なもの・確実なもの・不変なものへの渴望が潜んでいる言うことができるのではないか。自然科学的認識はできうる限り主観を排したものとして理解され、したがって、主観の関与は客観的認識、世界のありのままの認識の追求を阻害し、その生み出す像を歪めるものとされる。論証することは筆者の手に余るが、パーソン論者による種差別に対する主観を排した客観的理性的論難とされるものの背後には、自然科学をモデルとする世界認識についての理解、客観的認識についての狭い理解が潜んでおり、それが、明確な議論なしに自らの議論を展開する態度を生んでいると推察される。マックス・ウェーバーの言葉を用いれば、脱魔術化の後にも存在し続けている魔術化の残滓が理論の根底に潜んでいるのである。そこには、上で述べたような超越的な視点に立っているという無意識であれ意識的であれ、特権的な視点に立っているという自信が存在すると考えられる。しかし、このような前提自体を反省することが大切である。何よりも、他の概念の理解を断定的に間違っている、ないし混同の結果であると論断する正当化根拠が問われなければならない。

〔超越的視点概念の空虚さ〕

上で述べたような超越的視点概念は、明確で整合的な内容を持つようには思えない。周知の通り徹底した自然主義者、物理主義者であったクワインは「宇宙的亡命 (cosmic exile)」を否定し、自らの存在論の内在性を強調している。実際、超越的視点と理解されているものがまさにそのようなものであることを確証する根拠や手掛かりなど存在するのであろうか。このような問いについて思いを巡らせても無限背進が続くだけである。いかに根拠や基準や手掛かりを提出しても、それらが真に無限背進を停止させるものであるのかに関する確固とした基盤となるものは見出されていない。それゆえに哲学の様々な問題が永遠の問題として、議論が今も続いているのである。われわれの経験の世界を越えた超越的な世界のありのままの認識と言っても、それが経験と思考と言語を通して得られた認識がそれを正しく捉えていることを確かめる術をわれわれは

持っているようには見えない。形而上学的な直観、宗教的直観など、言語では表現できない直観的なものによって把握可能であると言っても、多様で対立しあう直観的理解・認識がある中で、そのいずれの直観を正しく正確なものであるのかを確かめることはできない。何よりも、通常を経験、思考、言語を超えた直観に基づくという定義を考慮すれば、理にかなった形での判定をなすことは不可能であると言わざるを得ない。経験を越えたありのままの世界と言ってもそれについてわれわれの理解と比較するときには、したがって認識論的な議論、検討の場に入るときには、超越の世界を云々しても、否応なしに超越的ではない通常概念、思考、言語によって表現されたものにならざるを得ないはずである。名高いセラーズの言葉を借りれば、理由の空間に入ることが必要であり、その時それは人間の有する概念空間の住人とならざるを得ないのである。そうでなければ、それを認識論や存在論において意味のある役割を果たすものと認めることは不可能である。この経験を越えたありのままの世界の認識なる概念自体が不整合なものと言わざるを得ないのである。科学の時代、非形而上学の時代と喧伝されるわれわれの時代においても、このような概念、そしてそれが表現する人間の条件を超えたいという願望、人間の有限性を超えたいという渴望から解放される必要が存在するのである。

さらに付け加えれば、科学哲学においてさえ、クワインが観察文を定義するに際して取り入れざるを得ないことから分かるように、観察の理論負荷性やクーンの理論が影響を与えているにもかかわらず、あくまで理性的、世俗的な理論を追求する中に宗教的な欲求と軌を一にする願望が力を及ぼしていることを見ることは意外でもあるし、人間の超越への渴望の強さを思わざるを得ない。とにかく、人間の条件を超えることを認めなければ、パーソン論者のような、細かい議論なしの論断は不可能である。そして、そこで必要となることは、パーソン論者の議論・立場とその批判の対象である種差別主義者の議論・立場のいずれが、人間の条件が示す限界の下でより良い人間や世界の理解や認識を提供するのかを、人間の条件内の経験、概念、思考、言語に照らして比較することである。種差別批判を支えている絶対的な、超越的視点の不可能性を

認めるならば、種差別の批判者も擁護者も同様のレベルに立ったうえでの議論による優劣を競うことになる。そこで焦点を与えるべき点は、どちらが人間という言葉と文化を有する動物の在り方の全体を、その微妙なニュアンスをも含めて理解し、判断する為のよりよい手段を提供するのだからである。そのような観点からは、自然科学的な語彙に優位を置くアприオリな根拠などは存在しない。あくまで今述べた目標に貢献する度合いによって、その評価がなされるべきなのである。

さらに繰り返しになるが重要な点であるので強調しておく、超越的視点を無意識にはあれ認めた上で自然科学的な知識や方法を認識のモデルとするとき、主観的なものの関与はすべて客観的な認識、すなわち対象のありのままの姿の認識を妨げるとして排除しなければならないということが至上命令になる。その時、感情や感動や感性的な直観は主観的なものとして否定的に捉えられそれが持つ積極的な意義は無視されてしまう。しかし、自然科学的モデルの優位性が否定され、有力に見えこそすれあくまで一つの立場の表明でしかないことが理解される時、それに連動して、客観性についての理解もより柔軟なものになり得る。主観的な要素の関与が直ちに認識の歪みを生み出すと理解されるのではなく、主観の関与を通して初めて姿を見せる世界の側面の存在の可能性が認められるようになるという主張も成り立ちうるのである。このような自然科学的モデルに依拠する狭い客観性の理解ではなく、より広い客観性の理解も可能なのである。次に、上で述べたパーソン論者の議論の後の二つの前提を検討し批判する。

〔潜在的能力の無化：個人主義と現在の能力への排他的着目〕

先に述べたような個人を他者との関係から切り離して捉え、さらにその時点での性質や能力のみに着目して、その対象が持つ潜在的能力の存在を見逃すことは、いかなる根拠、正当化理由が存在するのであろうか。むろん、その場面その時点での対象の姿を捉えているということが出来るかもしれないが、そこで得られる対象の理解は、極めて静態的で対象が持つダイナミックな在り方が

無視されている。言うまでもなく生きていることは、まさにダイナミックな側面を有している。人間一人一人、呼吸や食事によって様々な新たな物質を取り込むことによって、個人としてのアイデンティティを保ちつつ、それを支えている物質的基盤は絶えず変化している。さらに、他者との関係の中で、その個人の在り方が大きな影響を受けることは、多様な観点からの個人の発達過程の研究の中で明らかにされつつある事実である。それを私は、「人は人によって人として扱われることによって人となる」と表現する。それは、人間が他者とのかかわり、相互作用の中で変化する様々な潜在能力を発揮する可能性を持った存在であるということに基づいている。何よりも生命のダイナミズムは、生命体としての人間という動物の在り方の内にも存在している。他者との関係の質がその人の潜在能力の発現に大きな影響を与える。個体を他の人間との関係の中で様々な行動のパターンを示す存在であることが人間のより深い理解のために不可欠なのである。個人の人間としての健全な発達にとって、他者による取り扱いの質が大きな影響を持つのであり、その関係性の質が劣悪な場合は、様々な悲劇が起きうるのである。すなわち、他の人間や社会、ひいては世界に対する態度が不健全ないし不安定で不安に満ちたものになり得るのである。それに応じて心的性質や能力の変化ももたらされる。生きているということは同一性の維持とともに絶えず変化しているということをも含んでいる。このような生命体の、したがって、一個の生命体である人間の潜在能力の内に秘められたダイナミックな在り方に十分目を向けられない場合、すなわち、その変化に重要な役割を果たしている他者との関係性を無視する眼差しの下での人間の描写・理解は人間の姿を正しく十分に捉えることはできない。その意味で、パーソン論者の立場は、人間の姿を捉え損なっていると言わざるを得ない。この個人の資質・能力に焦点を当て、他者との関係性の中に生まれる個人の性質や能力の変化の可能性への注意が十分に考慮されることなく、人間という動物の基本的な在り方が見逃される。少なくとも、それに十分な重みが与えられないことになる。それでは適切な道徳的対応について有効な議論を展開することは困難になる。

以上のように、三つの前提は致命的な欠陥を有している。より現実の人間の複雑な在り方に即した道徳的対応を妨げる結果をもたらし得るものである。このような事実を踏まえて、パーソン論に代わり得る立場、それが持つ世界と人間についてのヴィジョンを次に述べることにする。

2. 内在的視点：超越的視点に代わるもの

〔「ありのままの世界」なる概念の空虚さ：ざらざらした複雑な世界へ〕

ここでは、超越的視点に立つ可能性を否定した場合の代案となり、種差別を肯定的に捉え得る立場を支える世界や人間に関する像を説明する。自然科学モデルは、まさに物理現象の説明に関しては有効であるかもしれないが、道徳や美や人々の複雑な内面の動きについての認識・理解について最適のモデルを提供しているとは言い難い。少なくとも、そのことを強力な説得力をもって示している事例はいまだ存在しない。さらに、通常自然科学が対象としている領域に関する認識についてさえ、予知とその説明における優れた力という人間の側の関心や利益に答える力を持っているなど、人間の関心といういわばこちら側の都合に依存せざるを得ないものである。より正確に言えば、こちらからの働きかけに対する反応、またその反応に応じて、それに意義づけ、価値づけを与える働きは、あくまで認識者の側の広い意味での感受力、理解力に依存している。世界に対しているとき、われわれはあくまでわれわれの関心・必要に応じて働きかけ、それに対する世界の反応を介して世界についての理解をなすことができるのである。そして、われわれの関心・必要を自覚し表現するための最も有効な手段となるものが言語である。しかも、言語はわれわれの関心・必要の内容を形作り、また改変する力を有している。それゆえに、われわれは、そのような重要な役割を果たしている言語を超えた認識を持つことができず、いわば、その幕を通してのみ、世界についての認識・理解が得られるだけである。このように考えるとき、幕と表現した言語に代表される関心や必要のプリズムと全く分離された「世界そのまま」なる概念自体が、実質的な意味を持ち

うるかどうか疑問視されざるを得ない。それは結局のところ、超越を求める人間の見果てぬ夢の表現・その物象化されたものとして以上の意味をもたないのではないのか。

今述べた立場に立つとき、われわれが形而上学的な夢の中で描く経験的世界を超えた世界、本質的に到達不可能な、いわばレベルの相違に基づく超越的な世界について語るよりも、われわれが理解できる限りでのレベルにおける世界で満足し、その世界のより正確な理解を求める努力に専心すべきである。そのように考えたとしても何も実質的なものを失うことがない。上記のプロセスを経て生み出される世界認識の理解は、単なる言葉の恣意的使用として提出されているのではない。われわれがわれわれの関心、利益に即して世界や他者に対して働きかけ、それに対して世界や他者は反応を返し、それに対してさらにわれわれがその反応を考慮したうえで再び働きかけをなし、そのプロセスは生命が続く限り繰り返される。したがって、そのような経験に基づく世界認識は、自己の視点からという限定付きではあるが、あくまで自己以外のものからのフィードバックに応じて作り上げられてゆくものであることは明らかである。単なる恣意的なものではないのであり、人間が自らの関心や利益に即した視点から世界に働きかけることは、避けることができない人間の条件である以上、それ以上の客観性を求めることは、人間以外のものにならうとする超越への欲求・誘惑に身を委ねることを意味する。そこに無自覚にはあれ、人間の条件を超えたかのような幻想、確実に不変な認識の獲得という幻想が生み出されるのではないのだろうか。人間の条件を超え、自らの関心からできる限り解放されようとするのも人間の関心の一つの表れであり、人間の視点を超えたものではない。したがって、有限な存在である人間の条件を痛切に自覚したうえでその視点からその時点で獲得可能な最良なものとしてコミットできる認識を求める努力が要請できるだけである。それを超えることは人間の条件を超えという不可能を要求に屈することであり、様々な歪み、誤りを生むことになる。このような人間の関心や利益に内在した視点をそのものとして受け入れつつ、その視点に内在する認識の最良化を目指すことしかできない。それが有限な人間

に最も相応しい認識の在り方であり、思考であると思われる。それゆえ、種差別を批判する側は、その批判がどのような仕方、正当化されるのかについての批判の正当化根拠を示す議論を展開すべきであるが、その基盤の正当化は、十分に明確な仕方ではなされているようには見えない。上で述べたような自然科学への依存と、自然科学をモデルとした客観性の概念と、個体が現実を持っている性質や能力への排他的な着目が議論なしに前提とされているだけである。

以上の議論から結論できることは、道徳についても人間の通常の視点から語り得るということである。そのことは、人間の利益のみを考慮して、他の動物の利益を一切顧みないことを意味はしない。他の動物についての道徳的思考も、われわれ人間が生み出してきた感性や、感性を踏まえつつ全体的な思考の中で生み出されてきたのである。そして、その生まれてきたものの内容を検討するならば、明らかに動物の利益を考慮する立場や態度が存在してきたことは否定しがたい事実である。むしろ、それと対立する立場や態度も存在してきたが、前者の存在は疑いようのない人間の歴史の事実である。この二つの立場のいずれを選択するのは、まさに人間の経験を踏まえた複雑なプロセスを考慮しつつ対象の正しい姿を理解するための全体的、すなわち、理性、感性、想像力等の人間の能力の全体を動員しつつ判断が下されるべきものなのである。その判断も、あくまで人間の広い開かれた視野の下での、注意深い判断ではあるが、それは人間の条件の範囲内で行われる、人間という有限な存在に相応しい努力の結果である。また、人間が生命体として変化の可能性を秘めた存在であることを考慮すれば、その判断が、誤りとして変更される可能性を常に認める可謬論的謙遜に裏打ちされた態度が促進されるべきである。次に、上記のような世界とその認識についての理解に基づいた人間の道徳に関する像を提示する。

〔代案となるヴィジョン〕

コーラ・ダイヤモンドが用いている例を用いれば、ディケンズの『互いの友(Our Mutual Friends)』の中で、唾棄すべき人物とみなされていた人物が溺

れ死にしそうになった時、その人物が唾棄すべきであることを熟知している人々が必死でその人物を助けようとする⁽⁴⁾。そのとき、助けようとする人々は、その人物の中に「生命の火のきらめき」を見、それを何とか絶やさないように努力した、とディケンズは書いている⁽⁵⁾。周りの人々は、生病老死という同一の人間の条件を共有する人物の命があわや絶えようとするときには、果敢ない生命の火を守ろうとすることに精魂を傾けるということがあり得るのである。生命を慈しむ態度、しかも同一の種に属するということから生じる数多くの同一性、相互依存性がそのような振る舞い、行為を生み出すのである。ダイヤモンドはコンラッドの同様な趣旨の言葉を『ナースィス号の黒人』の有名な序文から引用している⁽⁶⁾。文学者が読者の心の内に喚起することを目指すものとしてコンラッドが語るものは、「人間をお互いに、そして可視的な世界と結びつける、神秘的な起源、避けがたい連帯性、苦役、希望、不確実な運命についての感情」である。以上のような生氣ある表現は、人間の間で連帯感の存在を感性や想像力に働きかけることにより訴えている。それによって同じ人類という種に属することにより、様々な性質、潜在的能力の存在に基づく連帯感の存在が一定の説得力を持って感得させることができる表現である。人間の中に存在する連帯感の存在という事実は無視できないものである。実際、新生児殺や重度の心身の障害のゆえにパーソンである資格を失った人に対して示される道徳的に軽視する態度やその表明に対して、無視できない数の多くの人々が持つ反感や嫌悪は、単なる非合理的な感情の発露として退けることができない要素を含んでいる。それはコンラッドの言葉に心を動かされるわれわれの全体的な反応の在り方に根差しているのである。次にそれを支持する議論を示すことにする。

[潜在能力の道徳的意味：未来先取りの用法]

潜在能力がその道徳的意味のゆえに無視することが許されないことを示す。潜在能力の実現を促進することが人の健全な発達に不可欠であり、それゆえそれを十分に支えることは、人の人生の豊かさに重要な影響を与え得る。その意

味で、潜在能力を無視することは許されないのである。その事実を示す良い例を次に提示する。

注目すべきことは、対象がまだその概念が当てはまるために必要な能力や性質を身につけていないことを承知しながらその概念を用いることはわれわれが日常的に行っていることである。その典型的な例は、胎児の段階で、親があたかも物心がついた子供に話しかけるかのように、その子供を「すごい、あなたはスポーツ選手になれる」あるいは、「エンジニアになれるは」などと話しかけたり、「心の優しい子ね」などと話しかけたりするのである。これは、悪い意味で散文的・科学的に眺めれば、いかにも愚かな行為であることになる。胎児に、そのような発言が理解される可能性は皆無であり、単に親ばかりの表れでしかなくたわごとを並べているだけというように記述し理解することもできる。しかし、そのような見方の中で見失われることは、胎児から通常の間人へと成長を続けている存在にとって、そのような取り扱いを受けることが、その個体が持っている潜在能力の現実化をより豊かなものにするに役立つという厳然たる事実である。それだけではなく、尊敬に値する存在として扱われていることは、少なくとも優しく肯定的な形で扱われていることは、胎児でも自覚のないままにでも感じ、ついにはそれが肉体の中に内化されることは現実の人間の発達における紛れもない事実である。そのようにして他者や社会に対する信頼感の基礎が形作られるのである。その意味で健全な人間の発達とそれによるよりよい社会の成立と維持にとって、上記の未来先取りの語り方は、よき潜在能力の実現を促進し、他方、そのような潜在能力の実現を阻害するような態度や取り扱いは、個人の生の豊かさやまさに社会的連帯の質の低下を招くのである。したがって、シンガー流のパーソン論は、個人の健全な発達を助けるような人間関係の質を考慮しないことにより、個人の健全な発達の促進に寄与せず、それを妨げる考えであると言うことができる。この意味でも、より人間の具体的な在り方に十分な注意を払うことに意を注ぐ立場の道徳的な意義とともに、パーソン論が持つ危険な性格を知ることができるのである。

〔人種差別と種差別の相違〕

人間にまず道徳的思考の焦点を当て、それを尊重しようとする態度は、それに対する代案が理論的に不可能である以上仕方がないし、妥当なものとして受け入れざるを得ないものであるということが出来る。しかし、種差別批判者は、人間をより大事にする態度、人間に道徳的行為に値する対象としての優位を与える態度を人種差別や排外主義と同様のものであると批判している。内容は別として、その確実さ、堅固さ、特に超越性の面で比べた場合、二つの態度の間に意味のある相違は見出すことはできないのであろうか⁽⁷⁾。上のような批判を行う者は、自らは公平・中立な立場に立っているという自己理解を有していると思われる。すなわち、自らは一段高いレベルの視点から問題を考察していると考えていると思われる。しかし、超越的視点を否定する立場からは、そのような理解は幻想でしかなく、同一のレベルでの説得力を競う論争に参加せざるを得ないのである。まず考えるべきことは、後者のような場合は、人種によって知的能力や勤勉性、正直さなど道徳的能力そして文化的能力に差があるという種類の、実際は検討に耐えないものではあるが、数多くの正当化が行われてきており、そのような試みは今も続いている。他方、人間に優位を与える考えについては、自身の態度を大っぴらに認めつつ、それを正当化するさらなる根拠を提出することはあまりない。とにかく人間であるから、という以上の何かが正当化理由として持ち出されることは稀である。そのことは、ある意味で、それ以上の根拠が見出すことができないほどその態度が人間の生活に根差したものであると言うことができる。名高いクワインの比喩を転用すれば、われわれの複雑に絡み合った態度や関心からなる膨大な蜘蛛の巣の中で、それらの態度、判断、性向は内部の核の部分に位置し、それを改変することは論理的には不可能ではないけれど、そのような改変に対する抵抗が極めて大きい。実際それに対する実質的な懐疑の試みはなされず、なされても、それを追求することに力を注げないというのが実情ではないかと思われる。それほど、人間に対する特別な扱いはわれわれの身についている、いやわれわれの生活に深く根ざしたもののなのであると言っても良いであろう。

道徳的正当化ゲームを行う動物は基本的に人間だけであるということができ、その人間の主要な道徳的基盤について、硬い岩盤として、人間であること、という事実が存在するのである。個体の態度は、同じ種に属することから生まれる、理性、感情振る舞い等々の多種多様な同質性、そして群居性の動物として、互いに協力することによって、生き延びてきた歴史を背負っている。それはワイトゲンシュタインが魂への態度と呼んだ、極めて複雑な態度を互いに採り合って生きている事実存している。このような事実存に思いを致すとき、人間であるという種の同一性が人間の主要な道徳的基盤をなすことを、単なる人種差別や排外主義の一変種として扱うことは、個々の人間と彼らの間に存在する相互の連帯感の根強さを見逃すという悪しき結果を生み出す。上で述べた公平・中立を詠う態度と種差別を認めるものという二つの態度は、誤って同じレベルのものとはみなされてはいないが実は同一のレベルに属するものである。しかも、そのコミットメントの強さと深さには、後者のように単なる非合理的な偏見として片づけることができない、人間の基本的な在り方に根差しているという特徴が示されていると言うこともできる。この意味で、人間をまず道徳的視点の中心に据えつつ、それからの類似や類比によって、他の対象への道徳的態度を定めてゆくという在り方は、人類史と人類誌により即応した考えであり態度であると言うことができる。それゆえ、人類という種に属する他の人間を同胞とし、また死すべき運命を共有しつつ類似した生を営む者と捉えることは、人間の現実の在り方に即応したより豊かな人間の生活の促進に寄与する考え方であり、態度であると言うことができる。

以上のことから結果する人間に関するヴィジョンとそれを支える言語や世界観は以下のようなになる。

3. ま と め

人間は群居性の動物であり、何よりも数多くの異なった種の中の一つの種に属するという事実により、互いに類似した生の在り方を持っており、とりわ

け、その生活の中で何が大切であるのか、何が意味・意義を持つのかについて基本的部分について共有する部分が多い。むろん、時々刻々ダイナミックな生命過程を経る中で変化しうるものではあるが、その変化の在り方にも共有されている部分があり、また新たな変化が次第に共有されることも起こりうる。したがって、そこに同胞意識が生じることは自然な成り行きであり、何よりも、そのことを非難する人間の視点の外側にあると見なされている視点などは存在しないゆえに、そのような人間の視点を軸とする道徳的な思考をなすことに対する決定的な批判の根拠は見出せない。しかも、これまでの人間の歴史的蓄積の中で得られた、人間という概念を伴った生活にあり方の根深さと奥深さ、それがわれわれの生活の中で占める役割の重要さを考慮するとき、その視点を単なる人種差別などの一変種と捉えることには納得できる根拠を見出しがたい。

そして、広い客観性概念を受け入れ、日常言語によるより精緻な人間の在り方、それを支えている同種の生命とそれが持つ潜在的能力の共有に基礎を持つ同胞意識、それらを象徴するといえることができる貴重でありかつ果敢ない生命の火のきらめきへの尊重の念を道徳の一つの主要な核と考えるとき、パーソンとは認められない人に対する取り扱いも変わってこざるを得ない。少なくとも、同一の取り扱いを行うことが結果してもそれを導き出す思考内容はより複雑である。たとえ一方が様々な形での意識障害を負っている場合にあっては友情や愛情にあふれた者同士の一瞥や些末に見える表情の変化の中に含まれている様々な要素やそれらが持つ意味を十分に捉えることは、科学言語ではもちろんのこと、パーソン論者の視点からも十分に捉えることは極めて困難である^⑧。パーソンではなく、まさに人間であることが大切であり、そのことが意味する数多くのことが理解される必要がある。そのために、まさに自己に閉ざされた眼差しではなく、自己の悪しき磁力に打ち勝ったより外に開かれつつ、しかも深く繊細な注意が必要である。そのような観点からも広い意味での人文科学的教育の肝要さも強調されるべきである。

種差別は、有限な人間の在り方により即応した健全な立場であり、パーソン論は有限な人間の条件を超えた、抽象的で人間の具体的な姿を見誤った立場で

ある。すでに述べたように、人間の視点に立つことは、他の存在の価値を無視しうることを意味しはしない。そうではなく、あくまで開かれた態度を維持する努力を重ねながら、より良い立場を目指す試みが続けられるだけである。人間性についての否定的、懐疑的な見方が力を帯びるような状況がいろいろ力を持ちつつあるかに見える現状を鑑みれば、以上のような見方をより自覚し、その質の深化を追求する努力がより一層要請されていると言えるであろう。

文献表

1. Chappell, S. G, *Knowing What to Do, : Imagination, Virtue, and Platonism in Ethics*, Oxford University Press, 2014.
2. Crary, A. *Inside Ethics : On the Demands of Moral Thought* Harvard University Press, 2015.
3. Diamond, C. “How Many Legs?” in *Value and Understanding*, ed., by Raymond Gaita, Routledge, 1990.
4. ——— “The Importance of Being Human”, in *Human Bings*, ed., by Cockburn, D. s, Cambridge University Press, 1991.
5. ——— “We Are Perpetually Moralists : Iris Murdoch, Fact, and Value” in *Iris Murdoch and the Search for Human Goodness*, eds., Maria Antonaccio and William Schweiker, The University of Chicago Press, 1996, pp.79-109.
6. ——— *The Realistic Spirit : Wittgenstein, Philosophy, and the Mind*, MIT Press, 1991.
7. ——— “Murdoch the Explorer” *Philosophical Topics*, vol.38, no.1, 2010.
8. ——— “The Difficulty of Reality and the Difficulty of Philosophy” in Cavell, Diamond, C., McDowell J., Hacking I., and Wolfe, C. *Philosophy and Animal Life*, Columbia UP, 2008.
9. Grau, C., “A Sensible Speciesism”, *Philosophical Inquiries*, vol.4, no.1, 2016.
10. Mulhall, S. “Fearful Thoughts”, *London Review of Books*, 2012/11.
11. Singer, P., *Practical Ethics*, 2nd edition, Cambridge University Press, 1993.
12. Williams, Bernard, *Making Sense of Humanity*, Cambridge : Cambridge University Press, 1995.
13. ——— *Philosophy as a Humanistic Discipline*, ed. A. W. Moore, Princeton : Princeton University Press, 2006.

注

- (1) パーソン論の説明については参考文献 11 を参照。
- (2) 11 を除く他の参考文献から多くを学んだ。
- (3) たとえば参考文献 11 の p.334
- (4) 参考文献 3 の pp.168-169
- (5) 参考文献 4 の p.50
- (6) 参考文献 4 の p.50
- (7) 以下の議論は参考文献 13 に依存している。
- (8) 意識障害者とのコミュニケーションの問題については、驚くべき事例を含めて、当事者（介護者を含める）の経験により注意を向けた形でのより一層の解明がなされるべきである。

——文学部教授——